

研究テーマ	塑像づくりを通して立体造形力を養う －テラコッタづくり－
-------	---------------------------------

1 研究テーマについて

粘土は、身近な素材と言えるのだろうか。小学校での粘土の扱われ方を調査したところ、低学年では、必ず題材として取り扱っている。また学習時間の中で空いた時間の活用として、粘土遊びをする機会が多いのが実態である。しかし、中学年から高学年になるにしたがって、ほとんど粘土は活用されなくなる。換わって身近材を生かした題材が多く扱われているようになってくる。このように粘土は、発達段階に応じて適切に取り扱われているとは言えないのが現状である。

小学校で使用している粘土は、ほとんどが油土であり、土粘土はあまり使われていない。その理由として、油土は、児童一人一人が教材として持っていることや、準備、保存性の良さ、片付けが容易であること等が挙げられる。それに対して土粘土は、汚れる、乾くと堅くなり壊れやすい、保存性が悪く片付けが面倒等の理由から敬遠される傾向にある。

以上のことから、粘土は身近ではあるが、体験不足になりやすい素材と考えられる。

しかし、土粘土の扱いづらさも、裏を返せば粘土の本質であるとも言える。粘土は、優れた可塑性をもち、様々な造形活動に用いられてきた素材である。古くは埴輪や土偶、また古今東西様々な陶磁器、屋内外の装飾等……。扱いやすく開発された新素材も魅力的ではあるが、古くからの造形文化の側面から考えれば、土粘土を扱う価値は大きいのではないだろうか。

近年、映像文化の発展によって、立体的な映像への感受性は高まっているように思う。児童生徒は、映像の質や細かなディテールに鋭敏である。しかし、立体に表す力は、失われつつあるのではないかと危機感をもっている。ワープロの出現で読めるが書けない漢字が増えたように、立体的映像を見る目は豊かになったが、立体造形は苦手になっているのではないだろうか。「ものづくり日本」と言われるように、資源の乏しい我が国は、質の高いものを生み出すことで、現在の地位を築いてきた。そこには、つくり手のプライドも継承されてきたはずである。日本人として、受け継ぐべき伝統的なものづくりの資質と誇りを生徒に伝えることは、我々の責務である。以上のような理由から、本研究テーマを設定し、粘土を素材とした題材を実践することとした。

2 実践例

(1) 題材名 粘土でスケッチ

(2) 目 標

- 人体の比例に気を付けながら、意欲的に粘土でつくろうとする。（関心・意欲・態度）
- 素焼きする際の強度を考慮しながら、班で話し合っってポーズを決めたり、様々な角度からクロッキーをしたりすることができる。（発想・構想の能力）
- 人体の比例を理解し、クロッキーを基に粘土ペラを効果的に活用しながら塑像をつくることができる。（創造的な技能）

- 古くから扱われている造形素材としての粘土への理解を深めると共に、人体の比例に視点をおいて作品を鑑賞することができる。 (鑑賞の能力)

(3) 題材について

粘土は、可塑性に富み様々な形に形成することができる。反面、弾性はほとんど無く強度も高いとは言えない。粘土だけで大きな塊を細い柱で支えたり、長細い紐状或いは板状にし粘土を、吊り橋のように組み上げたりすることには不向きである。

粘土は身近ではあるが、小学校高学年以降ではあまり取り上げられていない素材である。低学年ではよく利用されているが、素材は油土である。したがって中学校に入学するまで学校で土粘土を扱うことは希だと言ってよい。

頭を大きく描くと、可愛らしい感じを出すことができる。人間でも他の動物でも小さな子供の頃は、頭の体全体に占める割合が高いためである。そのためか、特に女の子が描く人物像には、頭が大きく体が華奢なものをよく見かける。人体の比例を正しく理解してから人物を描くと、絵は大きく変化し次第に写実性を増してくる。

本題材を通して、粘土の特性への理解、人体の構造や比例の理解を深めさせたい。

小学校の高学年くらいになると、写実的に表現したいという欲求が高まる。しかし、思うように表せないと写実に対する意欲を失ってしまう。中学生になると、自分の写実に限界を感じ諦めてしまう生徒が増えてくる。そうした生徒にとって粘土は、取り組みやすい素材とも言える。実際に粘土で人体をつくることは、かなり難しいことである。しかし、短時間で細部に拘らずに制作することで、表面のディテールに目を奪われることなく、目標に迫れるのではないかと考えた。

本題材は、粘土の特性を生かしながら、人体を立体として捉えるものである。生徒は、人体の比例を理解した上でクロッキーを行い、まず平面上に表す。平面上に描かれたものから立体をイメージするためには、見る角度を変えて何枚かのクロッキーをする必要がある。この作業が、頭の中に正しく立体像を形づくる上で重要である。また、クロッキーの際には、関節の位置を意識させるようにする。頭の大きさや人体の比例ばかりを気にして描くよりは、短時間に人体のポーズを認識しやすいと考えたからである。

本題材では、焼成に適した縮みや割れの少ない土粘土を準備した。焼成することを意識し、体のパーツを繋ぎ合わせるのではなく、できるだけ一塊の粘土からひねり出すようにつくるよう指導する。現実的には、全ての生徒がそのように形成できるわけではないので、接着用にドベを用意し、接合した場合も割れないよう配慮した。多くの生徒は、油土とは違う土粘土の感触を楽しむことができると思うが、どうしても素手で触れない生徒のために、使い捨てのゴム手袋を用意した。

(4) 指導と評価の計画 (3時間取り扱い)

時	指導計画	評価規準	関意態	発想構想	技 能	鑑 賞
1	クロッキーをする。	○素焼きする際の強度を考慮しながら、班で話し合ってポーズを決めたり、協力し合い様々な角		◎	○	

		度からクロッキーをしたりすることができる。				
2	ポーズを大づかみに捉え形成する。	○人体の比例に気を付けながら意欲的に粘土でつくろうとする。	◎			○
		○古くから扱われている造形素材としての粘土への理解を深めることができる。	○			◎
3	人体のプロポーションを意識して仕上げる。	○人体の比例に気を付けながら意欲的に粘土でつくろうとする。	◎			○
		○クロッキーを基に粘土ベラを効果的に活用しながら塑像をつくることことができる。		○	◎	
		○人体の比例に視点をおいて作品を鑑賞することができる。	○			◎

(5) 学習の実際

時	学習活動	指導上の主な留意点	学習中の生徒の様子
1	1 テラコッタの作品を見て、素材や特徴について話し合う。	○以前生徒がつくった作品を見せ完成作品のイメージをもたせる。	◇素材は土で、焼いてあることは簡単に推測できた。 ◇簡単に土でつくった埴輪や陶磁器の話に関心をもって聞いていた。
	2 学習課題を知る。		
	人体をいろいろな角度からクロッキーしよう。	○ポーズは、粘土の特性や焼成することを考慮して、壊れにくいポーズを班で工夫する。 ○1人5分ポーズをとること、班ごとに同じポーズにすること、違う角度からクロッキーすること、細部に拘らず関節の位置を意識して人体の全部を描くこと等を知らせる。	◇クロッキーが理解できない生徒が多く驚いた。簡単に説明した。
3	人体をクロッキーする。	○頭部の大きさと体全体の大きさのバランスについて知らせ	◇班ごとにクロッキー。とにかく5分間集中して描くことがめあて。



	<p>4 人班で 1 人 5 分ずつポーズをとる。</p> <p>4 次時の予告を聞く。</p> <p>5 振り返りを行う。</p>	<p>ながら、クロッキーを修正させる。</p> <p>○今日クロッキーしたポーズを粘土でつくることを知らせる。</p> <p>○計画反省表に本時の反省を書かせる。</p>
2	<p>1 学習のめあてを知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>人体のバランスを考えて、粘土でスケッチをしよう。</p> </div> <p>2 粘土でつくる。</p> <p>3 片付けの方法と次時の予告を聞く。</p>	<p>○用具(粘土板、粘土ベラ、ドベ)と粘土を配付しておく。</p> <p>○粘土をできるだけちぎらずひねり出すように形成するように伝える。</p> <p>○接続部にはドベを接着剤にするようにさせる。</p> <p>○人体の比例について説明し、頭部の大きさを具体的に粘土で示す。</p> <p>○机間指導しながら個別に支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頭部の大きさ ・体の丸み ・関節の位置 ・ポーズのつけ方 等 <p>○濡れタオルで包みレジ袋に入れて保管することを知らせる。</p> <p>○次時は、クロッキーを基にポーズを整えることや頭・胴・腕・脚のバランスを確認して仕上げることを知らせる。</p>
3	<p>・ 2 時とほぼ同じ内容で進める。題材の最後に、乾燥と焼成について説明をする。</p>	



◇壊れにくいポーズを各班工夫していた。
(生徒)手足を伸ばしたポーズは難しいよね。



◇スケッチを見ながら制作中。
(生徒)ひねり出さって案外難しいよ。



◇なんとか形になった。
(生徒)頭は後からくっつけます。
(教師)ドベを接着剤にしてね。



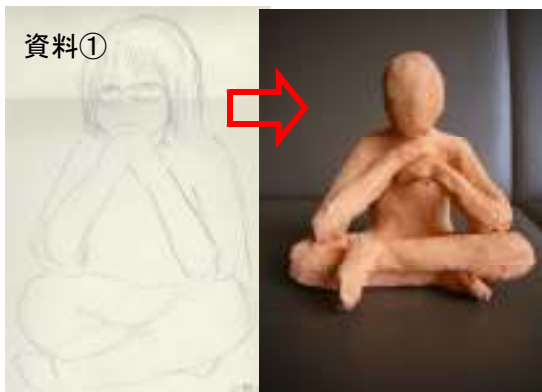
◇展示の様子



3 成果と課題

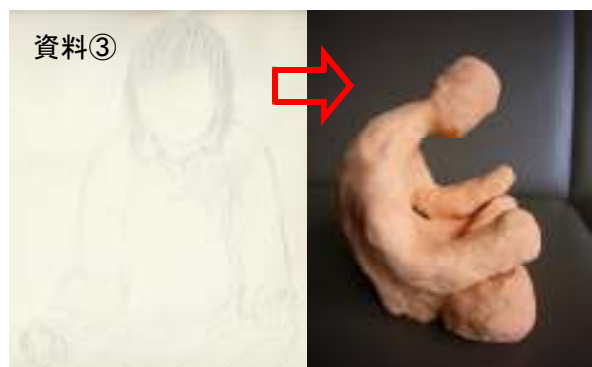
(1) 平面に表すことと立体に表すこと

近年、立体造形に関する技能が失われつつあるのではないかと感じていたが、今回の題材を実施した結果からは、明確な解答を導くことはできなかった。当然のことながら、平面上に写実的に表せる生徒のほとんどは、立体に表す力ももち合わせている。〈資料①〉また、平面上に捉えることが苦手であっても、粘土の扱いに慣れていて、巧みにつくる生徒も多く見られた。特に男子にはこの傾向がある。〈資料②〉



本題材では、立体（モチーフ）を平面（クロッキー）に表し、それを再度立体（テラコッタ）に表すという手順で行った。クロッキーを見ながらつくることで、粘土を操作する時間を確保するねらいがあった。しかし、資料②のような生徒の場合、実際のモチーフを見ながら粘土でつくった方がよかったのかもしれない。または、クロッキーはするにしても、モチーフを見ながらつくる時間を設定してもよかった。

逆に、平面に表すことは巧みであるが、立体にしてみると思うようにいかないと感じる生徒もいる。〈資料③〉このような特徴をもった生徒は、女子に多い。資料③の生徒は観念的に人物を描くことができる。その意味では、技能は高いと言える。しかし立体にしようとする時、体の厚みが捉えられず、満足のない様子であった。このような生徒は、立体を見る目は養われているので、自分の技能不足を強く感じてしまうようだ。ただ、ちょっとしたアドバイスで、立体に表すコツを掴むことも



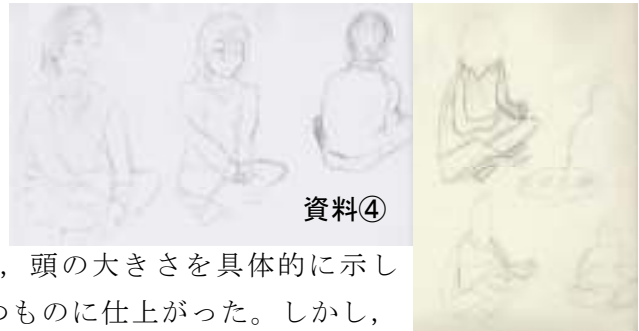
容易である。

クロッキーを取り入れたことは、粘土を扱う時間を確保したり、関節の位置を意識したりするために一定の成果があったと考えている。また、いろいろな角度から見て描く活動は、立体をイメージ化するのに役立った。

〈資料④〉

(2) 人体の比例という視点

体全体の中の頭の大きさを捉えることは、やはり難しい。粘土での制作を始める前に、6～7頭身の比例を学ぶと共に、頭の大きさを具体的に示した。多くの作品は、自然な人体比例をもつものに仕上がった。しかし、どうしても大きな頭になってしまう生徒もいた。〈資料⑤〉



また、関節の位置に着目しながらクロッキーしたことで、腕や脚の長さやポーズにリアリティが感じられる作品に仕上がった。しかし、肩の位置や大きさがうまく表現できず苦勞している生徒も見られた。(資料⑥) 肩の不自然さを直そうとすると、首が長くなってしまったり、胴にボリュームが無くなったりして、限られた粘土でバランスよくつくるのは難しいようである。粘土は可塑性はあるが弾性に乏しい。その性質に対する慣れの度合いも、大きく関わっているように感じた。

いきなりクロッキーした人体をひねり出すことに困難を感じる生徒には、まず、立像(実際は寝ている状態)をつくり、関節を意識しながらポーズをつけるよう助言した。ひとつ段階を踏むことで、制作へのストレスが軽減された生徒が多かった。また、立像をつくることで、人体の比例を感じやすいというメリットもあった。



(3) 立体造形力は養えたのか

造形力は、高まったのか。その成果の根拠となる客観的なデータはない。クロッキーにしても塑像づくりにしても、一定のスキルを養うためには、繰り返し練習する時間が必要である。今回土粘土を体験した生徒には、次年度は、芯材を使った塑像づくりを仕組む予定である。たっぷりと時間を取ることは難しいが、芯材の有無が制作にどれほどの違いを与えるか、生徒は感じてくれるに違いない。そうした小さな体験の積み重ねが、つくり手の意図を読み取ったり熱意や誇りを感じ取ったりする資質を養うと信じている。そして、ものづくり日本を支える人材を育てることができたなら、これに優る幸せはない。